教育実践報告

# 松本大学社会進出支援センターにおける就労支援の取り組み（その1）

小島 哲也・小林 敏枝・内藤 千尋・國府田 祐子・澤柳 秀子

Fostering Employment Support at the Social Empowerment Support Center of Matsumoto University.
(Part1)

KOJIMA Tetsuya, KOBAYASHI Toshie, NAITOH Chihiro,
KODA Yuko, and SAWAYANAGI Hideko

## 要　旨

本報告は、社会進出支援センターにおける就労支援の取り組みとして行われた特別支援学校(知的障害)生徒の職場実習について概要をまとめた。一般就労をめざす高等部生徒(3年生男子)1名の現場実習を、2018年5月から11月まで、3期に分けて延べ30日間受け入れた。実習では、附属農園の農作業、学内の野菜販売と美化活動、共同活動や会話練習など、実習生の行動特性と作業スキルに応じた支援プログラムを用意した。実習生のプロフィールと目標、実習の内容と評価結果を報告し、今後の就労支援における課題を指摘した。

## キーワード

社会進出支援センター　就労支援　特別支援学校　知的障害　職場実習

## 目　次

Ⅰ．はじめに

Ⅱ．職場実習

Ⅲ．まとめ

注

文献

# Ⅰ．はじめに

特別支援学校高等部卒業生の一般就労は、近年の障害者雇用に関連する法改正や経済状況の変化によって全国的に改善の傾向にあるが、依然として厳しい状況にある[1-3)注1]。そのため、特別支援学校では卒業後の自立と社会参加に向け、早い段階からのキャリア教育の導入、進路学習や職場実習による就労支援の充実、関係機関との連携強化、等の取り組みが求められている[4-7)]。

松本大学では2017年4月の教育学部開設を機に、特別支援学校卒業生の雇用拡大と就労支援の推進を目的とした社会進出支援センター（以下、センター）を学内に設置した[8)]。センター設置の1年後には、実習用フィールドとして利用する附属農園（約2a）を整備し、農園の維持管理と就労支援を担当するパート職員1名（以下、支援員）を採用した。

本報告は、社会進出支援センターにおける就労支援の取り組みとして初めて行われた特別支援学校（知的障害）高等部生徒の職場実習について、その概要をまとめた。実習の内容、評価結果について報告し、今後の就労支援における課題を指摘する。

# Ⅱ．職場実習

## 1．実習生のプロフィール

センターで職場実習（以下、実習）を行った生徒（以下、実習生またはＡさん）は、Ｙ特別支援（知的障害）学校高等部3学年に在籍する男子。実習開始時の年齢は17歳Ｘ月であった。卒業後の一般就労を目指し、これまでの作業学習の発展と社会自立準備の学習の機会とするため現場実習を計画したい、という学校の依頼を受け、本人面接を行った結果、Ａさんを実習生として受け入れることを決定した。

Ａさんには中程度（推定）の知的障害（療育手帳の等級はB1）があり、自閉症スペクトラム障害（広汎性発達障害）に特徴的な行動特性も認められた。表1にＡさんの実習目標と学校生活におけるプロフィールを示した。前年度（高2）の担任が作成した資料から抜粋したもので、実習の事前打ち合わせの際に「実習生についての連絡事項」として資料提供された。普段の学校生活の様子が6つの側面について具体的に書かれている。特に、自閉性障害に特有の対人関係やコミュニケーションの特徴、認知特性、こだわりに関する内容は、全実習を通して有用な支援情報となった。

## 2．実習の目標

学校ではＡさんの実習に2つの目標を掲げた。その1つは「指示されたことに意識を向けて、目の前の作業に時間いっぱい集中して取り組むことができる。」であった。指示理解や注意の集中・維持に困難を示すことの多い知的障害児に共通する内容である。プロフィールに書かれているように、Ａさんは、周囲の人から声がけや指差し、助言等を繰り返し受けることで、指示内容を理解（意識化）し先を見通す力を少しずつ身につけていた。

2つ目の目標は「時と場をわきまえた会話の仕方に気をつけて作業所の方と仲良く過ごすことができる。」であった。自閉症に特有の社会性とコミュニケーションの困難に関係する内容である。Ａさんは明るく穏やかな性格で、誰とでも親しくできる社交性がある。その一方で、状況把握、相手の意図や感情の理解に困難があり、本人の興味・関心に話題が集中し固執する傾向が強いことが課題として指摘されていた。

以上のプロフィールと実習目標を踏まえ、知的障害や自閉症スペクトラム障害のある児童・生徒の就労支援に関する事例研究や関連資料[9-12)]を参考にして実習の受け入れ体制を整えた。

## 3. 実習の内容

実習は、支援員と一緒に行う附属農園の畑仕事とその関連作業(①野菜の栽培・収穫;②作業所(大学構内にある約50㎡の独立建屋)での野菜洗いと花栽培;③学内での野菜販売と美化活動)を主に、2018年5月から11月まで、3期に分けて延べ30日間行われた。表2に、年間(4〜12月)の附属農園の農

表1 実習目標とプロフィール〈注〉

| | | |
|---|---|---|
| 実習の目標 | | ◎指示されたことに意識を向けて、目の前の作業に時間いっぱい集中して取り組むことができる。 ◎時と場をわきまえた会話の仕方に気をつけて、作業所の方と仲良く過ごすことができる。 |
| プロフィール | 健康面・体力面 | ○自宅からバス停まで30分歩いて登校するなど、体力はある。 ○午後になると集中力が低下し、眠くなることが多い。 ○座っていると姿勢が崩れることがある。 |
| | 生活面・学習面 | ○高２になってから寄宿舎での集団生活を始めた(月〜水)。 ○着替えは、繰り返し声がけしたり、着替えの後に指差し確認をするように助言すると、服の裾を整えたり、脱いだ服をカゴに入れたり、自分で気をつけようとしたりするようになった。 ○自分の好きなこと(鉄道関係)に意識が向くと、やるべきことを忘れたり忘れ物が多くなったりする。 ○小3程度の漢字の読み書きはできる。 ○硬貨を数えるとき一枚ずつ数える。塊で数を数えることは難しい。 ○二桁の加算や乗算ができ、電卓を使用しての小数の計算は意欲的。 |
| | 性格面 | ○いつでも周りに声を掛けてくれて、クラスを明るい雰囲気にしてくれる。<br>○交流や部集会など自分から色々な人に話しかけ、すぐに打ち解けて仲良くする姿が多く見られる。 ○穏やかで、厳しく言われても落ち込むことなく、いつもの明るい性格を持続できる。 |
| | 作業面・技能面 | ○作業班は高1が農耕班、高2は木工班に属した。班で製作したものを人から褒められると素直に喜び活動への意欲を高めることができる。 ○一つのことに固執すると他のことに注意が向かなくなることがあるが、作業内容や注意点を一緒に確認して見通しを持つことで作業技能が徐々に向上し、確実に取り組めるようになってきた。 ○同じ作業を繰り返す中で何度か注意されたことは自分なりに意識できるようになってきた。 |
| | 人間関係・指示理解・意思伝達など | ○誰にでも気軽に自分から話し掛けるが、相手の気持ちをあまり考えないためトラブルになってしまうことがある。 ○自分の好きなことを一方的に話す。<br>○全体の指示で動くことができるが、他からの強い刺激があると自分の興味あるほうへ傾倒することがある。 |
| | 持ち味・可能性 | ○新聞を読むのが好きで社会問題のニュースに興味がある。電車のことは特に詳しく、鉄道路線や車両名、過去の鉄道事故のことなどを記憶していて、よく話題にする。 ○内容ややり方を指示するだけでなく、終わりを正確に示すことで活動を確実に終えることが多くある。また、終えた後に本人の好きな活動を用意することで集中して取り組むことができる。 |
| | 生活上の課題・配慮点 | ○初対面の相手にも友達のように話し掛けることがある。その時は「今は話しません」と言ってください。 ○ブツブツと独り言を言ったり汽笛の「ピー」の声を出したりする。その時は目の前のことに集中するように声がけをお願いします。<br>○吃音がある。その時は落ち着いて話すようさりげなく声がけしてください。 |

〈注〉実習①事前打ち合わせ資料「実習生についての連絡事項」より抜粋して引用、一部改変。

作業と関連作業を一覧にして示した。

Aさんの実習に農作業を取り入れた理由は、彼が学校の作業学習で農耕班メンバーとして積極的に活動していること、どの作業も安全面と体力面で問題がないこと、相互に関連する様々な活動を体験できること、であった。また、知的障害や精神障害のある人々の学習活動や生活支援、リハビリテーションに農業(農作業)を取り入れ、成果を上げている実践報告[13]の知見も判断材料となった。いずれの実習も、事前に学校関係者(進路指導主事、就職支援コーディネーター、担任)と打ち合わせを行い、その内容をもとに実施計画(作業内容と日程)を作成した。実習中、Aさんは電車で自宅の最寄り駅から松本大学前の駅まで片道約20分の経路を一人で通勤した。以下に、各実習の概要について述べる。

### 1)第一期

第一期の実習(以下、実習①)は、一学期に2週間(5月28日～6月4日、週末を除く実質10日)行われた。勤務は午前9時30分から午後3時30分までの6時間(昼休み1時間)であった。実習中は、朝(はじめの会)のミーティングで支援員と一緒に作業内容や手順を確認し、夕方(おわりの会)は一日のふり返りと日報記入を行った。

午前中は毎日、施肥と畝立て等の準備を既に済ませた農園の畑へ支援員と一緒に移動し、野菜の種まきと苗植えを行った(図1)。途中、用具一式を載せたリヤカーを慎重に押し引きし、周囲の安全を確認しながら移動する姿が見られた。午後は主に作業所で花の種まき、肥料や土の準備、その他の軽作業を行った(図2)。

Aさんは学校の活動(農耕班)で農作業を経験し

表2　附属農園の作業内容(2018年4～12月)

| | 作業内容(○花・野菜　◆畑) | | 実習、その他 |
|---|---|---|---|
| 4月 | ○マリーゴールド、ミニひまわり、日々草の種まき；ラベンダーの苗植え；きゅうり、ミニトマト、ズッキーニ、ジャガイモ、長ネギの苗植え　◆土起こし、畝立て、マルチ張り、施肥、もみ殻混ぜ込み；水路掃除 | 農園看板設置<br>耕耘機レンタル | |
| 5月 | ○朝顔の種まき；シソ、トマト、茄子、さつまいも、枝豆の苗植え；ジャガイモ芽かき；花苗ポット移植、ラベンダー植付け<br>◆プラ支柱立て、黒マルチ張替え、草取り、散水；油かす・化成肥料の混ぜ込み | | 実習①<br>(5/28－6/8) |
| 6月 | ○いんげん、オクラの種まき；ズッキーニ人工授粉；ジャガイモ土寄せ；きゅうり、ミニトマト、茄子、ズッキーニの収穫；枝豆摘芯；花ポット構内設置　◆野菜用支柱立て、ネット張り；草取り、散水 | 作業小屋改修<br>野菜販売開始<br>(6/27) | 高綱中収穫体験(6/21) |
| 7月 | ○大葉収穫、花ポット販売<br>◆草取り、散水 | 作業所エアコン設置 | 実習②前期<br>(7/30－8/3) |
| 8月 | ○枝豆、オクラの初出荷；ジャガイモ収穫；きゅうり収穫完了；ミニトマト大量収穫　◆草刈り、散水 | | 実習②後期<br>(8/20-24) |
| 9月 | ○トマト収穫完了；春菊、大根、野沢菜の種まき；ニラ植付け | | |
| 10月 | ○ニンニク種植え、さつまいも収穫 | 耕運機購入 | |
| 11月 | ○玉ねぎ苗植え、ビオラ・パンジー鉢植え；大根販売(事務棟) | 作業小屋塗装<br>野菜販売終了<br>(11/25) | 実習③<br>(11/5－16) |
| 12月 | ◆土起こし、畑片付け | | |

ているため、畑仕事には初日から楽しく取り組むことができた。初めての作業も支援員のモデルを観察しながら行うことができたが、手順の確認や指示を聴く際の集中が途切れがちで、支援員から注意、催促されることが時々あった。また、農園の畑のすぐ側に電車の線路と踏切があるため、作業中に電車が通過すると手を休め、車両を追視したり独り言(電車関連の話題)を言ったりすることが時々あった。

全体を通して、Aさんは初めての実習を順調に乗り切ることができた。毎朝にこやかに挨拶をする彼は周囲の人たちの印象も良く、好意的に受け入れられた。なお、実習による緊張と疲れが影響したためか週末に発熱と下痢で体調を崩し、通院と自宅療養のため週明けの1日だけ欠席した。

図1. 実習①:農園の畑作業(支柱立て)

図2. 実習①:作業所での野菜洗い

### 2)第二期

第二期の実習(以下、実習②)は、夏休み中の2週間(7月30日～8月3日、8月20日～24日;実質10日)に行われた。7月中旬から連日猛暑が続いていたため出勤時刻を早め、午前8時30分から正午までの半日勤務とした。作業所はエアコンがあるため室内作業は快適に行うことができたが、熱中症を回避するため屋外の農作業(野菜収穫など)は午前中の短時間に済ませ、その後は作業所で作業した。教育学部入口に飾った花の水やり、4階フロアに設置された朝採り野菜コーナーの販売準備も実習②の日課となった。

実習②では、大学構内の教室で支援者(著者の小島と澤柳、共にセンター員)と一緒に行う共同活動(折り紙、新聞切り抜き、料理)を新たに取り入れた(図3・4)。実習①の農作業や日報記入の際に、Aさんの指先の細かな動作や力の入れ具合に難があることに支援員が気づき、爪噛みによる影響が考えられた。そのため、ハサミ、カッター、スティックのり、包丁などの道具を使う際の指先動作を観察し、対応方法を検討することにした。同時に、支援者との挨拶や会話、物のやりとりなど対人的コミュニケーションの行動全般を観察した。

全体を通して、Aさんは新しい作業や共同活動に興味をもって熱心に取り組んだ。ただ、実習後半まで暑い日が続いたため、疲労が溜まった時に注意力、集中力が途切れてしまうことがあった。完成させた新聞記事のスクラップ帳は自宅へ持ち帰り、折り紙の作品は野菜販売コーナーの掲示板に飾ってもらった。なお、指先動作の観察は継続して行うことにし、爪噛みについては実習最終日に来学した保護者(母親)と相談し、家庭で様子を見てもらうことになった。

### 3)第三期

第三期の実習(以下、実習③)は、二学期に2週間(11月5～16日;週末を除く実質10日)行われ、勤務時間は実習①と同じだった。Aさんの希望で、

農作業以外に木工作業を新たに取り入れた。また、卒業後の就労生活に備え、社会的スキルトレーニング(SST)[14-16]の視点から会話練習を行った。

会話練習は毎回、昼休み後の約1時間、Aさんと支援者、ボランティア学生1、2名が参加し、実習②(共同活動)と同じ教室で計4回行われた(図5)。Aさんが大学生との会話を楽しむだけでなく、実習目標の「時と場をわきまえた会話の仕方に気をつけ(る)」ことを意識化できるように会話内容を工夫した。日毎のテーマ(①私の家族;②学校生活;③最近の出来事;④実習の成果)について、お茶を飲みながら自由な雰囲気で会話を楽しんだ。支援者はAさんや学生の発話、質問、応答等の機会と内容を調整する役割(ファシリテーター)を努めた。[共同活動と会話練習については、次回「その2」として本誌に報告予定。]

図3. 実習②:支援者との共同活動(新聞切り抜き)

図4. 実習②:支援者との共同活動(料理)

実習2週目、畑で収穫したダイコンの販売を事務棟で行った(図6・7)。普段顔を合わせることの少ない方にもAさんの実習の様子を見てもらう良い機会になった。本人からは「声をかけてもらい嬉しかった」「大きなダイコンが沢山売れてよ

図5. 実習③:大学生との会話練習

図6. 実習③:野菜(ダイコン)の収穫

図7. 実習③:事務棟での野菜販売

かった。美味しく食べてもらいたい。」という感想が聞けた。実習最終日には担任と保護者(母親)も参加し、これまでの実習をふり返った。Aさんは、同席した全員に感謝の言葉を伝え、卒業後の進路や就労に向けて希望と抱負を力強く語ってくれた。

## 4. 実習の評価

Aさんは実習①の欠席1日(校医の「出校停止」指示による)を除き、欠勤、遅刻、トラブルは一度もなく3期の実習を終えることができた。各期の実習終了後、「実習評価カード」を学校へ提出した。評価カードには、実習でAさんの支援を直接に担当した支援員と支援者の評価内容を取りまとめ、総合評価としての結果を記載した。14項目について3段階の基準で評価を行い、各項目に短いコメント(特記事項)を記入した。

表3に、各期の評価カードの内容を一覧にして示した。最下段に示した平均評価点は、各項目の評価結果(A、B、C)を点数化(それぞれ3、2、1点)して得られた平均値である。評価の結果、実習①は、14項目中11項目がA評価、3項目がB評価で、平均評価点は2.78だった。実習②は14項目中7項目がA評価、6項目がB評価、1項目(持続力)がC評価で、平均評価点は2.43だった。実習③は14項目中10項目がA評価、4項目がB評価で、平均評価点は2.71だった。実習期間を通して7項目(安全性、理解力、速度、責任感、体力、対人関係、言葉遣い)は毎回Aの高い評価が得られた。一方、実習②の項目「持続力」のみC評価となったが、特記事項にもある通り、実習前の7月中旬から続いた猛暑の影響で作業中の体力消耗と疲労が大きく、仕方のない結果であった。

3項目(準備・片付け、確実性、積極性)は実習を通して毎回B評価であった。低い評価になった理由として、「作業を見通し次のステップを自分で判断することの困難さ」、「指示を待つ受け身の姿勢」などAさんの行動特性を挙げることができるかもしれない。しかし同時に、Aさんにも理解しやすい活動スケジュール(時間と内容)や作業手順の示し方、分かりやすいモデルや言語指示の出し方など、支援環境側の準備や工夫が不十分だったことが作業に影響した可能性もある。今後、自閉症スペクトラム障害の認知特性、応用行動分析に基づく支援アプローチなど、実習現場での具体的支援に役立つ研究知見[17-19]を参考にして検討し、改善を図りたい。

# Ⅲ. まとめ

特別支援学校における進路指導は、個別の指導計画、個別の教育支援計画(個別移行支援計画を含む)、作業学習、職業・進路相談、関係機関連携、職場実習を柱にして行われている。特に高等部における職場実習は「社会を知り、自分の将来を考える」ための大きな節目に位置づけられ、進路担当教員や就労支援コーディネーターが中心となり、ハローワークや受け入れ企業を含む関連機関との綿密な連携の下で行われる。今回の報告事例での経験からも、それぞれの事業所が職場実習を受け入れ、卒業後の就労につながる効果的な支援を行うためには、学校の進路指導の成果を活用すること、そのために教育現場と日常的な連携を築くことが重要な条件になると思われる。

長野県は、第3次長野県教育振興基本計画の個別計画として第2次長野県特別支援教育推進計画(2018～2022年度)[20]を策定し、特別支援教育の目指すべき基本方向を「すべての子どもが持てる力を最大限に発揮し、共に学び合うインクルーシブな教育」と定めた。その中で、計画推進の拠点となる特別支援学校における教育の充実を図るため、推進目標の1つに「卒業後の自立につながるキャリア教育の充実」を掲げ、以下の4つの具体的方針を打ち出した。①生徒が希望する進路を実現できる支援の充実;②地域と連携したキャリア教育

## 表3　実習の評価（項目別）〈注〉

| | 評価項目 | 評価基準 | 実習①<br>5/28－6/8（1学期）<br>評価 | 特記事項 | 実習②<br>7/30－8/3、8/20－24（夏休み）<br>評価 | 特記事項 | 実習③<br>11/5－16（2学期）<br>評価 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 準備・片付け | a. 自分からきちんとできる<br>b. 時々指示を必要とする<br>c. 言われるとできる | B | 椅子、靴など、身の回りの物の片付けが時々だが指示しないと行えない。 | B | （前回実習と同様） | B | 身の回りの片付けについて注意・指示することが多かったが、少しずつ自分から片付けるようになった。 |
| 2 | やり続ける力（持続力） | a. 最後まで頑張ってできる<br>b. 時々声をかければ続く<br>c. 気分のむらがあり、飽きやすい | A | 最後まで作業を行う意志と十分な体力がある。疲れた時には集中力が途切れることがあった。 | C | 猛暑の中の実習で体力的にきついこともあり、前回実習と比べて疲労が大きく作業の集中に影響した。 | A | 実習②に比べ、持続力が向上した。自分の興味ある木工作業などに目的を持って取り組んだ。 |
| 3 | きちんとやる力（確実性） | a. 確実にできる<br>b. 時々確認すれば、正確にできる<br>c. 不確実（不良品が多い） | B | 支援者が確認を一緒に行うことで、慣れない作業も確実にできた。 | B | （前回実習と同様） | B | 畑の大根の収穫、葉むしり、洗浄、袋詰め等の一連の作業を丁寧にできるようになった。 |
| 4 | 手先の器用さ（巧緻性） | a. 細かい作業ができる<br>b. 大まかな作業ならできる<br>c. 手先の細かな作業は困難 | A | 畑仕事、花苗の手入れ等も支援者のモデルをよく見て作業できた。細かい部分はまだ困難。 | B | 指先の爪噛みの影響と思われるが細かな作業時に力が入らない。 | B | 作業道具、鉛筆、箸やスプーンなど、指先の力の入れ具合が悪い（わからない？）ため細かな作業が難しい。 |
| 5 | 安全性 | a. 危険物を理解し、適切に対応できる<br>b. 教えられたことは守ろうとする<br>c. 注意散漫で、危険である | A | 農園までリヤカーを引いて移動する際の安全確認、刃物等の道具の使い方も適切だった。 | A | 問題なし | A | 慎重な面が随所に見られる。作業スピードが遅れるため、影響を考慮しながら見守るようにした。 |
| 6 | 指示を理解する力（理解力） | a. 理解が早い<br>b. 時間をかければ、理解できる<br>c. 理解が遅い | A | 支援者の指示内容をよく理解できていた。時折、傾聴する注意力の集中が切れることもあった。 | A | 時々、支援者の指示を聴かないまま適当にやり取りすることがあり、注意することがあった。 | A | 指示の仕方や内容にもよるが、実習作業の範囲内では理解力は優れている。 |
| 7 | 作業を速くやる力（速度） | a. 速い<br>b. 与えられた作業はこなせる<br>c. 遅い | A | 十分な速さで行うことができた。ただし、確実さが求められる作業では遅くてもかまわない。 | A | 問題なし | A | 上述（項目6）のように慎重なところがあるため特に早くこなせるわけではないが、問題ない。 |
| 8 | 任された仕事をやる力（責任感） | a. 責任感が強い<br>b. どうにか責任が果たせる<br>c. あまり当てにならない | A | 目的意識、作業に対する意欲は強いと感じられた。 | A | 問題なし | A | 時々、約束した手順や場所を忘れることもあったが、指摘すると反省し適切に修正できた。 |
| 9 | 体力 | a. 労働に対応できる<br>b. まあまあ普通<br>c. 力が不足している | A | 問題なし。体調不良による欠勤は、実習の疲れがピークに達したことも原因か。 | A | 今夏の実習ではさすがの体力もやや消耗してしまった。 | A | 実習中の作業内容に限って言えば問題なし。 |
| 10 | 人と仲良くする力（対人関係） | a. 誰とでも仲良くできる<br>b. 指導者が入れば他の人と交われる<br>c. 自分勝手、好き嫌いが見られる | A | 社交性があり誰とでも気持ちの良い挨拶、会話ができた。大学でも評判が良かった | A | 問題なし | A | 最も評価が高い能力と言える。実習中に大学生を交えて行ったSSTの会話練習もスムーズにできた。 |
| 11 | 進んでやる力（積極性） | a. 進んで作業をする<br>b. 決められたことはする<br>c. 言わないとしない | B | 短期間の実習であったため自ら見通しを持ち予定を立てることは困難だったと思われる。 | B | 疲れたり気が進まない時に指示待ち状態になる。今後の成長を望みたい。 | B | 疲れたり気が進まない時（退所前や金曜日の午後など）は注意散漫になり指示待ち状態になることがあった。 |
| 12 | 指示を受ける態度 | a. すぐに指示を受けられる<br>b. 繰り返しの指示を必要とする<br>c. 指示を聞こうとしない | A | 素直な態度で支援者の指示や注意を受け入れることができた。 | B | 上述（項目11）のような状況で注意、傾聴の姿勢が不十分になることがあった。 | A | 上述（項目11）のような場合を除き、素直に指示を受け入れることができるようになった。 |
| 13 | 言葉遣い | a. 正しく使える<br>b. 注意されると言い直そうとする<br>c. 正しく使えない | A | 問題なし | A | 問題なし | A | 問題なし。敬語の使い方等は大学生よりも優れ周囲の者が目を見張るくらいだった。 |
| 14 | 質問する力（意思伝達） | a. 自分から質問できる<br>b. 声をかけると質問できる<br>c. 分からないことを質問できない | A | 問題なし。ただし、作業内容に関係のない自分の興味・関心のある話題の質問が多かった。 | B | 具体的な事柄を分かりやすく質問すると素早く応答できる。自ら質問することはやや苦手か。 | A | 質問する、その応答を受け入れ対応する、という意志伝達は基本的に問題なし。 |
| 平均評価点 | | | 2.78 | | 2.43 | | 2.71 | |

〈注〉評価（A、B、C）は、支援スタッフの段階評価（a、b、c）を総合した結果。平均評価点は、14項目の評価結果を点数化（3、2、1点）して平均した値。

の充実；③高等部における教育活動の充実；④生涯にわたる学びや社会とのつながりをつくる学習活動。これらの方針が県内の教育現場と各地域でどのように展開され実現されていくのか、今後の動向に注目し成果を期待したい。

社会進出支援センターでは、特別支援教育や障害者雇用の最近の情勢[注2]をふまえ、障害のある高等部生徒の職場実習を可能な限り受け入れ、学校や地域と連携して障害者の就労支援を積極的に推進する予定である。地域密着型大学に求められる課題解決と新たな課題発掘に向けた取り組みを今後も積極的に行っていきたい。

## 謝辞

Ａさんの職場実習を受け入れるにあたり、Ａさんのご家族、Ｙ特別支援学校の先生方、学校法人松商学園および松本大学の関係者の皆様に、多大なご支援とご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。また、実習を通して熱心に取り組み最後まで頑張ったＡさんには、センター員一同、心より感謝し、卒業後のさらなる活躍を期待します。

## 付記

本稿に掲載した写真はすべて著者の小島が実習中に撮影した。本論文の公表と写真の掲載については、Ａさんと保護者、Ｙ特別支援学校、その他関係者の承諾を得ている。本研究は、2018年度松本大学研究助成費(研究代表者・小島)より一部補助を受けて行われた。

### 注

注1 長野県教育委員会[1]の報告によると、県内特別支援学校(国立大学附属1校を含め計20校)の2017年度高等部卒業生(計368名)の進路状況は、社会福祉施設等が245名(66.6%)、一般就労が98名(26.6%)、進学・その他が25名(6.8%)であった。一般就労は2016年度(26.2%)から微増してはいるが横ばい状態で、全国平均(2017年5月集計30.1%)と比較すると長野県は明らかに低いことが分かる。就職先を業種別に見ると、製造業(39.8%)、卸売業小売業(25.5%)、清掃、クリーニング、飲食、宿泊等のサービス業(14.3%)の3業種が全体の約8割(79.6%)を占め、医療・福祉(9.2%)と農業(6.1%)がそれに続いている。

注2 小島ら[8]は、2018年1～2月、松本大学、関東地区の私立大学2校、信越地区の国立大学法人C大学の計4機関を対象に、障害者の雇用状況に関する聴き取り調査を行った。その結果、C大学(算定基礎職員2,000人以上)では実雇用率が法定雇用率(調査時点で2.3%)を上回っていた。一方、本学を含む私立大学3校は算定基礎職員数が小規模(100～400人)の学校法人で、いずれも実雇用率が法定雇用率(民間企業と同じ2.0%)を下回り雇用障害者数が不足していた。しかし、4大学とも2018年4月からの法定雇用率引き上げ(＋0.2ポイント)を前提にした雇用計画の立案、継続雇用のために必要な環境整備と合理的配慮等を工夫して行っていることが分かった。

### 文献

1) 長野県教育委員会特別支援教育課「平成29年度特別支援学校高等部卒業者の進路状況について」(2018)
https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/kyoiku/goannai/kaigiroku/h30/teireikai/documents/1037-h2.pdf(閲覧日2018.11.15)

2) 文部科学省「平成29年度学校基本調査(確定値)の公表について」(2017)
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2018/02/05/1388639_1.pdf(閲覧日2018.11.15)

3) 文部科学省「平成30年度学校基本調査(確定値)の公表について」(2018)
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2018/12/25/1407449_1.pdf(閲覧日2019.1.15)

4) 文部科学省「障害者の雇用を支える連携体制の構築・強化について」の改正について」(2014)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1347813.htm(閲覧日2018.11.15)

5) 国立特別支援教育総合研究所(編著)『特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック』.ジアース教育新社(2011)

6) 菊池一文『特別支援教育充実のためのキャリア

教育ケースブック』（第2版），ジアース教育新社（2012）
7) 尾崎祐三，松矢勝宏（編著）『キャリア教育の充実と障害者雇用のこれから』，ジアース教育新社（2013）
8) 小島哲也，小林敏枝，内藤千尋「松本大学における障がい者雇用の推進に向けた予備研究」，第6回松本大学教員研究発表会抄録集，p.31（2018）
9) 樋口陽子，納富恵子「知的障害特別支援学校における自閉症生徒の就労支援の取り組み」．『特殊教育学研究』，48（2），pp.97-109（2010）
10) 高齢・障害・求職者雇用支援機構「知的障害者の職場定着推進マニュアル（障害者職域拡大マニュアル14）」（2015）
http://www.jeed.or.jp/disability/data/handbook/manual/ocp_outline.html（閲覧日2018.4.20）．
11) 高齢・障害・求職者雇用支援機構「はじめからわかる障害者雇用―事業主のためのＱ＆Ａ集」（2016）
http://www.jeed.or.jp/disability/data/handbook/qa.html（閲覧日2018.11.15）
12) 高齢・障害・求職者雇用支援機構「平成30年度版就業支援ハンドブック」（2018）
http://www.jeed.or.jp/disability/data/handbook/handbook.html（閲覧日2018.11.15）
13) 小島哲也，宮地弘一郎，白神晃子「信州大学における特別支援教育臨床実習の新たな取り組み―地域企業と連携した学校農園プロジェクト―」『松本大学研究紀要』，16，pp.135-141（2018）
14) 岡島純子，鈴木伸一「自閉症スペクトラム障害児に対する社会的スキル訓練―欧米との比較による日本における現状と課題―」，『カウンセリング研究』，45（4），pp.229-238（2012）
15) 藤野博「学齢期の高機能自閉症スペクトラム障害児に対する社会性の支援に関する研究動向」，『特殊教育学研究』，51（1），pp.63-72（2013）
16) 山本真也，香美裕子，小椋瑞恵，井澤信三「高機能広汎性発達障害者に対する就労に関するソーシャルスキルの形成におけるSSTとシミュレーション訓練の効果の検討」，『特殊教育学研究』，51（3），pp.291-299（2013）
17) 松下浩之，園山繁樹「新規刺激の提示や活動の切り替えに困難を示す自閉性障害児における活動スケジュールを用いた支援」，『特殊教育学研究』，51（3），pp.279-289（2013）
18) 片桐正敏「自閉症スペクトラム障害の知覚・認知特性と代償能力」，『特殊教育学研究』，52（2），pp.97-106（2014）
19) 須藤邦彦「わが国の自閉症スペクトラム障害における応用行動分析学をベースにした実践研究の展望―2012年から2017年」，『教育心理学年報』，57，pp.171-178（2018）
20) 長野県教育委員会「第2次長野県特別支援教育推進計画」（2018）
https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/tokubetsushien/tokubetsushien/tokubetsushien/documents/2keikaku.pdf（閲覧日2018.11.15）